老舎小説の食譜 ― 長編小説『離婚』編（下）

齋 藤 匡 史
Tadashi SAITOU

187,【白菜】báicài　第十，一 247-3
188,【年糕】niángāo　第十，一247-3
・旧暦の正月になった。正月というものは子どもたちのためのものだと，李君は考えている。…（略）…　だが李夫人の方は，他人がいろいろ買物をしたり，白菜をはこばせたり，年糕（餅米の粉を蒸して作る正月の餅）を注文したりしているのを見て，気が気でなくなり，眉をよせて涙がこぼれそうになった。91
◆景物。

189,【鮮红的扁萝卜】xiānhóng de biǎnluóbo
第十，一 247-14
190,【鵝黄的白菜心】éhuáng de báicàixīn
第十，一 247-15
191,【小蒜瓣】xiǎosuànbàn　第十，一 247-15
・馬夫人がかごに入れた目もさめるようなまっ赤な平べったい赤大根の真中に，黄色い白菜の花を挿し，まわりに五，六本にんにくの青々とした若芽をつけたかざりを持っている。91
◆「平べったい赤大根」は「カブ」，「黄色い白菜の花」ではなく白菜の芯。

192,【萝卜】luóbo　第十，一 248-16
193,【白菜】báicài　第十，一 248-17
194,【萝卜】luóbo　第十，一 248-20
・「これをどこにかけたらいいかしら？英ちゃん」彼女はその大根のかざりを高く差しあげ，「持って遊ぶものじゃないの掛けておくのよ。明日になったら，白菜がかわいい黄色いお花を咲かせるわよ」…（略）…　92
◆194「大根」，不訳。

195,【红萝卜】hóngluóbo　第十，一 249-10
・彼はひとしきり，あの赤大根のかざりをながめながら，手をズボンのポケットにつっこんで考えこんでいた，「どうして実家のものが，彼女を邪魔にするんだろう」93
◆象徴。

196,【山里红】shānlihóng　第十，二　249-2
197,【酱油】jiàngyóu　第十，二　249-4
198,【羊肉】yángròu　第十，二　249-4
199,【羊肉】yángròu　第十，二　249-6
・李夫人は勝ちほこって帰ってきた。…（略）…
鼻の先はこごえて，さんざしの実のようにまっ赤になっていたが，威風凛凛として，戸口を凱旋門のようにはいってきた。わたした二十円は，わずか十銭と銅銭二枚をのこすだけになって，しかもまだ醤油や羊の肉やいろんなこまごまとしたものは買っていないのだ。李君は何もいわなかった，彼女をほめもしなかった。93
・「羊の肉がまだ買っていないんですよ」という。彼はフンと鼻をならした。93

200,【口蘑】kǒumó　第十，二　250-7
・「口蘑（コウモ）（蒙古産のきのこ）は，どうしてこんなに高いんでしょう」と李夫人がため息をつけば，「高くなかったら『高』蘑とはいいませんよ。高い。まったく高いですよ」と丁さんもため息をつ

く。93-94

◆「もうこしめじ」のこと，「口」は張家口を指す。

201,【扁红萝卜】biǎn hóngluóbo

第十，二　250-26

・彼女はふと，あの赤大根のかざりを目にした。

「これは誰が持ってきたの？」

「東棟の小母さんだよ」と英がいった。94

202,【鹅黄的白菜心】éhuáng de báicài xīn

第十，二　251-14

203,【红萝卜】hóngluóbo　第十，二　251-14

・黄色い白菜の花を中心に挿した赤大根のかざりを，ポンと，痰つぼの中に投げこんだら，いっそう彼女は，これで無事一段落すんだという気がした。95

204,【鲜蘑菇】xiān mógū　第十，三 251-2

・綿入れの長衣は秋の柳のようにだらりとしおれ，ズボンは麻袋のようにだぶだぶし，帽子は新しいきのこのようにもこもこしている。―けっして帽子が新しいのではない。95

205,【两壶酒】liǎng hú jiǔ　第十，三 252-3

206,【两壶酒】liǎng hú jiǔ　第十，三 252-4

207,【酒】jiǔ　第十，三252-15

・「お酒を二本ほど持ってきましょうか」とボーイが提案した。

「そうだお酒を二本，二本，結構ですな」と丁さんはいった。

その他の料理も，ボーイが提案し，二人の客がすぐさま議案を通過可決した。

・李君はボーイを呼んで，酒をもう一本たのんだ。丁さんはしきりに，もう結構です，とことわったが，酒がくると，手酌でいっぱいにつぎ，一口にあおると…（略）96

208,【子孙饽饽】zǐsūn bōbo　第十，三 252-26

・ところが嫁をもらったら，フン，彼女はわたしの家についた時からわたしをきらったのです。どういうわけか，ひどくきらいました。どうしたらいいんです。わたしは彼女をおどしつけてやりました。するとどうです。彼女は子孫餑餑（ツースンボーボー）（結婚の初夜に二人で食べるマントウ）を食べるお碗までなげつける始末。そりゃもう，大げんかをやりました。でも結局は，わたしがまけました。この丁がおとなしいからです。96

◆特製の餃子のこと。栗，落花生，棗などを餡にし，半煮にし，生（なま）かどうか周囲の者が聞く，「生」の答えは。子孫を「生む」に通じる縁起もの。

209,【红萝卜】hóngluóbo　第十，四 255-19

210,【年糕】niángāo　第十，四 255-23

・それに不義をおさえるには現場で両方をとらえる必要がある。赤大根ひとつではどうもむりだ。…（略）…　しかし，夫を殺したら，夫殺しの罪人になるではないか。彼女は考えれば考えるほど，頭がこんがらがって，一晩中よくねむれなかった。野良犬が年糕（ネンカオ）をぬすんで逃げる夢を二度も見た。99

211,【年菜】niáncài　第十，四 255-24

212,【馒头】mántou　第十，四 255-25

・翌日，李君は，馬奥さんの顔を一目見たくてしょうがなかった。だがちょうど寒い日で，馬夫人はどうやら家からでないつもりらしい。李夫人自身も正月の料理の準備にいそがしく，ちょっと台所から離れられない。だが，マントウをむしているとき，ふと思いついて，

「英！東の棟へ行って，小母さんの様子を見て

おいで」

「昨日，かあちゃんはもう行っちゃいけない，といったろ」99

213,【红萝卜】hóngluóbo　第十，五 256-5

・「けんかなんかしません，誓います。だから，どうしてあれがあなたを」

「あの赤大根のかざりですよ。じゃこれで。わけはもうお話ししてしまったし，これからは，わたしたち—ああ，わたし俥にのって行きますから，ここで」101

214,【年菜】niáncài　第十一，一 260-2

215,【年菜】niáncài　第十一，一 260-7

・李夫人は，正月の料理を作ったり，張奥（チャン）さんたちの贈物のお返しをしたり，子供たちを着かざったりしている。103

・このおれは平凡きわまる男だ，彼女の独立自尊の精神を愛すれば愛するほど，いくじのない自分がなさけない。彼は妻の丹精の正月料理を食べているのに，顔がげっそりと痩せた。103

216,【瓜子】guāzi　第十一，一 261-7

・彼女の影が窓のところで二，三度うごいた，瓜子児（クワツル）をかじっているらしい。通りで，バカに大きな爆竹がいくつか鳴った。104

217,【卖酪的】mài lào de 第十一，一 261-12

・表門の外に乳酪売り（牛乳，羊乳を煮て冷やしたクリーム状のものを売りあるく）がやってきて，二，三度，長くひっぱった抑揚のある呼び声をあげた。104

◆竹中伸訳では，「牛酪（チーズ）売り」とする。「ヨーグルト」である。『京都叫賣図』書目文献出版社，1994年発行（原著「Calls, Sounds and Merchandise of the Peking Street Peddlars」1930年代）の「賣酪的」によれば，「酪」は糊状の液体で，おもな原料は牛乳で，製法はモンゴルから伝わり，牛乳を加熱し，「江米酒（甘酒）」を加え，糊状のものができる，とある。

218,【年菜】niáncài　第十一，二 263-8

・彼女は彼をなぐさめるすべを知らない。親愛の情を示そうとするときは，いつも，「正月の料理，まだあなたにのこしてあるのよ，早くよくなって食べてくださいね」というようなことしかいえない。こんな言葉は彼に何の感動も与えない。106

219,【吕宋烟粗细的面条】lǚsòngyān cūxì de miàntiáo　第十一，三 266-4

220,【烙饼】làobǐng　第十一，三 266-5

・二李（アルリー）というのは，妻の実家の者だ。いなかで日やといの作男をしている。葉巻ぐらいのふとさのうどんを作ったり，烙餅（ラオビン）（小麦粉をねって丸くうすく焼いたもの）を焼いたり，きものを洗濯したりすることができる，走り使いもむろんできる。109

◆話題。

221,【水果】shuǐguǒ　第十一，三 266-7

222,【水果】shuǐguǒ　第十一，三 266-13

・趙は実ににこやかで，しかもたくさんのくだものを買ってきた。109

・趙は，こんな晨星など，つまみとって井戸になげ込んでやりたかったが，当面急にはつまみとれないとなると，くだものでも買って，この病気のお星さまにお供えし，適当な機会に彼からほんとうの話をひきだすよりしかたがない。111

223,【鹅】é　第十二，二 272-9

224,【鴨儿】yār　第十二，二 272-9

225,【鴨子】yāzi　第十二，二 272-10

226,【煮熟的鴨子儿】zhǔshóu de yāzǐr

第十二，二 272-11

・「…（略）つまり，とんとん拍子にいっちまったんですよ，ヘッ！とにかく十九という年ごろの娘ですからね！趙児はちょうど天津に行ってて，夢にも御ぞんじない。それが数日前，帰ってきて，ひょいと見れば，おやおや，せっかく煮えた―何でしたっけ？北京のことわざで，鵝鳥でしたっけ？鴨児（ヤール）でしたっけ？」

「鴨子（ヤーツ）（かも）ですよ！」

「そうそう，せっかく煮えたかもが，また飛びだしたってわけです。…（略）」 115

◆「かも」ではなく，アヒル。比喩。

227,【大扁杏仁儿】dàbiǎn xìngrénr

第十二，二 272-18

・あの大きなまないた夫人の体は，三百斤以上もあるんですから，大したもんです！呉太極が引離さなかったら，趙児はとっくにせんべいですよ。まったく。…（略）」115

◆意訳：ペチャンコになったアンズのさね。

228,【大扁杏仁】dàbiǎn xìngrén

第十二，三 274-11

・趙はせんべいにされるのはまっぴらなので，行こうとしない。117

229,【驴肉】lǘròu　第十三，四 290-2

・「…ぼくは少年のころ，野生のロバだった。ところが中年になって結婚し，役所につとめたら，こんなこすっからいがんこロバになってしまった。将来は，徳勝門外につれて行かれて殺され，大きな鍋で煮られて，ロバ肉料理として売られるんだろう。もう檻の外へ飛びだすことはできない。誰だってできやしない。…（略）」132

◆比喩。

230,【猪肉韭黄饺子】zhūròu jiǔhuáng jiǎozi

第十三，四 290-12

231,【三仙汤】sānxiāntāng　第十三，四 290-12

・李君はクルリとうしろをむいて，街にひきかえした。一軒の小料理屋にはいって，豚肉とにらのもやしの餃子（チアオツ）を三十個と，三仙湯（サンシエンタン）（三つの材料を入れたスープ。魚，貝，えび，肉，などを用いる）を注文した。132

◆「にらのもやし」とあるが，キニラのこと。「三仙湯」は「三鮮湯」とも言われ，金華ハムもしくは塩漬ハムは具として欠かせない。

◆竹中訳『老小全』（p 392），豚肉と韮の芽の餃子，三鮮湯（ハムとウニとタケノコのお汁）。

232,【果子】guǒzi　第十五，一 305-13

233,【桃】táo　第十五，一 305-16

234,【桃】táo　第十五，一 305-18

235,【小桃】xiǎotáo　第十五，一 305-19

・これまで，彼は女に対して，まるでくだものでも買うように，よく熟れたのを選んだ。熟れてさえいれば，すこしぐらいの傷はかまわない。147

・こんどの女は，ポッチリとふちの方に赤みがさしたばかりの桃である。…（略）…色づきかけたばかりの桃は，見た目はきれいでも口にはまずい，人に贈るにはどうも不適当だ。とくに軍人たちの口には合うまい。あの連中は腕のよいのがお気に入りだが，あの小さなかわいい桃に腕があるとは思えない。147

◆比喩

236,【黄油】huángyóu　第十五，一 307-13

237,【苏打水】sūdǎshuǐ　第十五，一 307-14
238,【冰激凌】bīngjīlíng　第十五，一 307-14
・趙の知っている英語は少なくない。汽車の食堂車のボーイからちょいちょい教えてもらって，バターとか，ソーダ水とか，アイスクリームなどは，すべて中国語を使わずに注文できる。 149
◆話題。

239,【口香糖】kǒuxiāngtáng　第十五，一 309-10
240,【口香糖】kǒuxiāngtáng　第十五，一 309-11
241,【水果】shuǐguǒ　第十五，一 309-12
・「わたし，兄さんにチューインガムを持って行ってあげたいの」
「ぼくが，うまく差し入れてあげますよ。チューインガムですね」趙は空を仰いで，ちょっと考え，「それにくだものを添えましょうか。ぼくにすっかり任してくだされば，うまく人に頼んで差し入れますよ。…（略）」151

242,【汽水】qìshuǐ　第十五，二 309-1
243,【鮮藕】xiān'ǒu　第十五，二 309-1
244,【鮮核桃】xiānhétao　第十五，二 309-1
245,【水果】shuǐguǒ　第十五，二 309-2
・五竜亭（北海の西北岸にある。明の大素殿跡。五つの亭が連なりこの名あり。そこで茶屋をやっている）のいちばん西の部屋にはいると，趙（チヤオ）は，サイダーと，蓮の根と，くるみを注文した。彼女は何だか御ちそうになるのがわるいような気がした。これまでときどき同級の女学生にくだものをおごってもらうことはあっても，男の友だちから御ちそうになったことはない。151

246,【嫩藕】nèn'ǒu　第十五，二 309-10
・彼女は，まっ白な蓮の根をとって，口に入れ，彼にむかってにっこりと笑ったが，話すことは何もなかった。152
◆象徴，若い女性。

247,【点心】diǎnxīn　第十五，二 310-6
248,【点心】diǎnxīn　第十五，二 310-7
249,【点心】diǎnxīn　第十五，二 310-8
・彼はまた点心を注文した。もうダメ，点心までいただくわけにはいかない。むしろこちらからお返しに何かとらなきゃならないが，何をとったらいいのだろう？見当もつかないし，そんなことをいいだすのもはずかしい。点心を食べるのはよそう，おなかもすいていない。… 152

250,【汽水】qìshuǐ　第十五，二 311-9
・いっしょにサイダーをのみ，ボートにのり，食事をした。それは一つの夢が現実になったことであり，彼女はたしかに感動した。彼はこわい人ではない。… 153

251,【酸梅汤】suānméitāng　第十五，二 311-23
・ひどくのどがかわいたので，またかけおりて酸梅湯（ソアンメイタン）（青梅の乾かしたのを砂糖水につけた夏の飲み物）を二杯のんだ。
◆酸梅湯は，「烏梅」と呼ばれる青梅を燻醸したものとサンザシの実を砂糖や甘草，桂花などの香料を加えて煮詰めたもので，これを粉末にしたものが市販されている。冷たくした酸梅湯を売り歩くのは夏の風物，夏には欠かせない伝統的な清涼飲料である。260の項参照。

252,【炒豆儿】chǎodòur　第十五，三 312-1
・趙（チヤオ）の頭もいそがしかった，あれこれ考えながら，彼の目玉は，いり豆のようにはねまわっていた。154

253,【汽水】qìshuǐ　第十五，三 312-5

254,【冰激凌】bīngjīlíng　第十五，三 313-6

・こんどの品は，ちょっと未熟すぎるが，そのかわりサイダーの二，三本と一回の食事しかかからなかった。154

・趙はそれからアイスクリームを二杯ものんだ。彼の気もちは，氷のように爽快だった。155

255,【烙饼摊子】làobǐng tānzi

第十六，三 318-12

256,【芝麻酱面】zhīmajiàng miàn

第十六，三 318-12

・だが，西単牌楼（シータンパイロウ）は，ある面では国産ブルジョア的であり，場所によっては―たとえば，烙餅（ラオビン）の露店とか，ゴマ味噌うどんの大どんぶりとか―むしろプロレタリア的である。だから，普通の人にとっては，ここの方が，この土地特有の風物が多く，気楽で気もちがよい。160

257,【青菜瓜果】qīngcài guāguǒ

第十六，三 318-16

258,【便宜坊的烤鸭】Biànyífáng de kǎoyā

第十六，三 318-16

259,【羊肉馅包子】yángròuxiàn bāozi

第十六，三 318-17

・ここの街は，…（略）…カフェーの女給，百貨店の日本製雑貨，新しい麦わら帽をかぶるか白のズック靴をはいて得意になっている男女の学生，色とりどりの野菜やくだもの，便宜坊（ペンイーフアン）（あひる料理の専門店）のあひるの丸焼き，羊の肉のあんが入っているマントウ，花瓶にさしたひめばしょうと晩香玉（ワンシアンユー）（月下香のこと）の花，などがいっしょくたになって奇妙に調和している。160

◆便宜坊は明朝永楽年間創業の600年の歴史をもつ北京ダック専門の老舗。現在は崇文門外，哈徳門飯店のほか北京市内に数店舗展開している。

260,【酸梅汤】suānméitāng　第十六，三 318-19

261,【西瓜】xīgua　第十六，三 318-20

・夕日が山に沈むころ，娘たちは，夏のきものでいちばん気に入っている色模様の長衣を着てあらわれる。酸梅湯（ソアンメイタン）売りのならす冰盏（ビンチャン）（二つの真鍮の碗の鳴り物）は済んだ高い音をひびかせ，西瓜売りは，呼び声を長くひっぱってたくみにふるわせる。160

◆景物

262,【酒】jiǔ　第十六，三 319-17

・「女の目の色とあるくそぶりをみればを見れば，すぐわかるんです」

彼はいそいで酒を一杯あおり，「秀真が帰ってきたんです，今日のことです。…（略）」161

263,【熟瓜】shúguā　第十六，三 320-9

・「まったく，女というものは，あまりにもわけない。そしてまた，あまりにもむつかしい。わけないとなれば，まるで熟れきった瓜のように，ちょっとさわっただけで破れてしまうのに，むつかしいとなると，天にのぼるよりむつかしい。…（略）」162

264,【咖啡】kāfēi　第十六，五 324-11

265,【咖啡】kāfēi　第十六，五 324-11

266,【咖啡】kāfēi　第十六，五 324-12

267,【牛乳】niúrǔ　第十六，五 324-13

・李（リー）君はコーヒーがきらいだった，コーヒーをのむと，小さなカップ一杯でも一晩中ねむれなくなる。だが，いまや彼は，にがくて，まっ黒で，神経を興奮させる，生命のコーヒーをのもうと決意した。北京はあまりにも牛乳のようだ。しかもす

でにすっぱくなりかかっている。167

◆比喩

268,【三白香瓜】sānbáixiāngguā

第十六，五 325-24

・大きなまくわ瓜（三白香瓜（サンパイシアンコワ）といって北京特有の上質のまくわ瓜）を一つ買って，英の口をふさぐと，彼は，べつにあてはなかったが，あるかぬわけにもいかぬと，あてどもなくあるきだした。168

◆「北京特有の最上の西瓜。皮が白く肉が白く種子が白いのでこの称がある」竹中『老小全』，p 434

269,【汽水】qìshuǐ　第十七，一 326-11

・「そうか，夢の中で，秀真が帰ってきて，これまた，うれしかった。しばらくすると，どうもわたしたち結婚式をやってるらしいんだ。庭にはアンペラ掛けの宴会場がつくられ，『喜』の字のガラスがとりつけられ，料理人の王二（ワンアル）がくる，親戚や友人もくる，そしてたくさんのサイダーがとどけられてきた。秀真が嫁に行くんだ。それで婿は誰だと思う？あててごらん」169

270,【韮菜】jiǔcài　第十八，四 342-9

271,【小白菜】xiǎobáicài　第十八，四 342-9

・菜園からとってきたばかりのにらや白菜が，泥をつけたまま店にだされていたが，きたないという感じはなく，どの葉にもいっぱい，きれいな水玉がくっついていた。185

272,【挂面】guàmiàn　第十八，，四 343-24

273,【杏仁粉】xìngrénfěn　第十八，四 343-24

274,【杏仁粉】xìngrénfěn　第十八，四 343-25

・…必ずみんなが合作し，最も役に立たぬものを買う必要がある，実用的なものは，役人らしくなく失礼だ。贈答品専門店にある，まるで糸のような乾うどんをちょっぴり入れた錦の化粧箱，それから，杏仁粉（リンレンフェン）（あんずの粉，あんず茶に用う）の匂いだけはするが，いくらさがしてもかんじんの粉は見当たらないような化粧小箱などが理想的贈り物ということになった。186

275,【蜜桃】mìtáo　第十八，五 345-9

276,【鮮藕】xiān'ǒu　第十八，五 345-10

277,【鮮核桃】xiān hétao　第十八，五 345-10

・料理を注文し，花を一荷分買った。それから息子のために水密桃をいくつか念入りに選んで買った。娘も帰ってきているから，やはり何かうまいものを買ってやらねばならない。生の蓮とくるみにしよう，あの子はこまごましたおやつが好きだから。…」183

278,【西瓜】xīguā　第十八，六 346-5

・西棟の建物のまえには，円テーブルが置かれ，まっ白なテーブル・クロスがかかっている。角テーブルの上には，美麗煙と安全マッチとサイダー瓶とが置いてあり，テーブルの下には西瓜が二つ三つころがっている。西瓜はどれもまるで，緑色のペンキのぬりたてのように，よく拭いてみがいてある。 190

279,【瓜子】guāzi　第十八，六 346-7

・彼女の顔は，今日は特に，上気したように赤く，たえず瓜子児（クワツル）をかみながら，しきりと何か考えている。190

280,【竹叶青】zhúyèqīng　第十八，六 347-5

・自分で買ってきた竹葉青（チューイエチン）（上等の紹興酒）は，安くてしかも本物だ，ボーイたちがとっくりにあ

けるのを，見張っていよう，油断は禁物だ，…190

◆紹興酒ではなく，汾酒ベースのリキュール。山西省の杏花村汾酒工場が生産。最も古い竹葉青酒は単に竹の葉に浸しただけで，色は青く美味であることから「竹葉青」と呼ばれるようになった。汾酒をベースにしており，広木香や公丁香，竹葉，陳皮，砂仁，当帰，零陵香，紫檀香など10数種の貴重な薬種のほか，氷砂糖と白砂糖を浸して作られている。

281，【碧螺春】bìluóchūn　第十八，六 347-7

282，【汽水】qìshuǐ　第十八，六 347-8

283，【汽水】qìshuǐ第十八，六 347-8

284，【碧螺春】bìluóchūn　第十八，六 347-8

285，【汽水】qìshuǐ　第十八，六 347-9

・一文でも多く節約すれば，それだけ多く息子に残してやることができる。碧螺春（上等のお茶）を入れて，冷蔵庫にひやしておくと，香りがよくさっぱりして冷たいので，来客がむやみとサイダーを開けるのを防ぐことができる，サイダーは一本二十銭だが，碧螺春なら，かなりうまいものでも一両（約十匁）で二十銭だ，一両あればきゅうすに五，六杯は入れられる。サイダーは開けるときの音がどうも耳ざわりだ。190

◆「碧螺春」は，江蘇省太湖洞庭産が有名。果樹園の中に茶樹が植えられ，果樹の香りが茶に移るといわれる。茶葉は渦巻き状で，白い産毛が特徴の高級緑茶。

286，【瓜子】guāzi　第十八，六 348-1

287，【汽水】qìshuǐ　第十八，六 348-1

・瓜子児の皮が，庭の敷きがわらの上にすてられてしきりに音をたて，サイダーを抜くシューッ，シューッという音がひびき，たばこの紫煙が軒のあたりまで立ちのぼって蚊の群れを追い払っている。191

◆景物

288，【蛤壳】géqiào　第十九，一 350-11

・…呉太極が免職になってから，李君と趙とは，どうも関係があるらしい。

だが李君は何もいわない。みんなはいよいよ彼が何もかも知っているのだと思いこんだ。なんて手ごわい男だ。かきのように口をかたくしてやがる。193

◆あさり，はまぐり等の貝をいう。

289，【羊肉西葫芦馅的饺子】yángròu xīhúlú xiàn de jiǎozi　第十九，二 351-1

・李夫人は，羊の肉と西葫蘆（夕顔の種をおろして，餃子の餡に使う）の餡を入れた餃子を作って，張兄貴を歓待するつもりだったが，張兄貴が厚意を受けてくれないので，がっかりした。

◆ズッキーニに似たカボチャの一種で餃子の餡に使用する。英名cucurbita pepo。

290，【羊肉馅】yángròuxiàn　第十九，二 352-2

・ところが，張兄貴が帰って間もなく，丁さんがきてくれた。李夫人はほんの二言か三言でたちまち餃子の食べ主をつかまえた。

「結構ですな，結構ですな，わたしは羊肉の餡が何より好きなんです」といいながら，彼は，性の抜けたような麻の長衣をぬいで，小麦粉をこねに行こうとした。195

291，【子孙饽饽】zǐsūn bōbo　第十九，二 352-10

292，【子孙饽饽】zǐsūn bōbo　第十九，二 352-12

・「さあ，お聞き，英ちゃん。はじめから話してあげよう」

「お碗をなげつけるところからだよ。何のお碗だっけ」と英が聞く。

「子孫餑餑（ツースンポーポー）（結婚式の夜，二人で食べるマントウ，子孫繁栄を祈る縁起もの）のお碗だよ。じゃそこからはじめよう。わしのお嫁さんはな，花嫁かごをおりたとたんから，わしを嫌ってな，それはひどく嫌ったんだよ。わしは始めが肝腎だと思ってオドシツケテヤッタ。フン。彼女ときたら―」

「子孫餑餑のお碗までなげつけた！」と英がつづける。195

293,【酒】jiǔ　第十九，二 352-20

・子どもたちが，すきあらば口をはさもうと耳をすましているのに，丁さんは，突然話をよこ道にそらせた。

「ねえ，英ちゃん，お酒あるかい？なかったら，おかあちゃんからお金をもらって，三人で買いに行こうよ。すこしのめば，もっと上手にお話ししてあげられるんだよ！」195

294,【酒】jiǔ　第十九，二 353-2

295,【酒】jiǔ　第十九，二 353-3

296,【饽饽】bōbo　第十九，二 353-4

・李君は笑った，丁さんが菱の手を引き，茶碗をもち，そして，チビクロが十銭札をもっている，その恰好が，どういうわけか，妙におかしかったのである。

「いまちょうど，子どもさんたちにお話をしてたんですが，ちょっとお酒がのみたくなって―」英がまたつづけた，

「お酒をのんだら，もっと上手にお話しするんだって，ぼくたち餑餑をなげつけるところまで聞いたんだ―何の餑餑だっけ？　196

297,【酒】jiǔ　第十九，二 353-5

298,【莲花白】liánhuābái　第十九，二 353-7

299,【桃】táo　第十九，二 353-7

300,【莲蓬】liánpéng　第十九，二 353-8

301,【酒】jiǔ　第十九，二 353-8

302,【莲蓬】liánpéng　第十九，二 353-8

・李君は笑うのをやめた。彼は，自分もひどく酒がのみたい気もちになっているのに気づいた。みんなといっしょにあるきだしたが，酒屋までくると，英をひきとめ，

「もっとむこうへ行って買おう」といった。

一軒の食料品店にはいると，彼は蓮花白（レンホアパイ）（薬酒の名）を一本と，桃をいくつか，それから，あざやかな，緑色をした茎が，まだ，そんなに伸びていない蜂の巣のような子房ごとの蓮の実を二本買った。酒は丁さんにわたした。菱は，蓮の実にすっかりねらいをつけ，自分が持って行くといって聞かない。196

◆「蓮花白」は北京海淀産のものが良いと，老舎作品『趙子曰』，『黒白李』にも登場する。

303,【香瓜】xiāngguā　第十九，二 353-9

304,【香瓜】xiāngguā　第十九，二 353-10

305,【酒】jiǔ　第十九，二 353-12

・英は，何も持つものがないので，手の中の十銭札をながめていたが，店をでると，店ばたで売っているまくわ瓜の荷のそばに走って行き，

「まくわ瓜を十銭おくれ。おいしいのをね」とすわりこみ，大きな黒い目玉で見開いて，瓜の荷をあちこち見まわした。

李君がそばに行って三つえら，びだしもう十銭足してわたした。英はうれしくてたまらず，丁さんをまたひっぱっていた，

「丁小父さん，ぼくもすこしお酒をのまなきゃ」196

306,【莲蓬】liánpéng　第十九，二 353-14
・菱は蓮の実をどうしても手ばなそうとせず，誰がちょうだいといっても，承知しない。李君はふと思いつき，手を下について耳もとに口を寄せると何やらささやいた。菱はそれでも手から離さなかったが，急にそのわけがわかったとみえ，蓮の実を一本だけ下に置くと，英に，
「このあおいの―さわっちゃダメよ」といった。196
◆二つめの「蓮の実」は加訳

307,【莲蓬】liánpéng　第十九，二 353-21
・彼女は，外へでると，
「馬小母さん。―このあおいのあげるよ―」
　馬小母さんが，いそいででてきて，
「菱ちゃん。わたしにくださるの」
「とうちゃんがね，このあおいの，小母さんにあげなさいというの―」といいながら，胸に抱きしめて，まだ手ばなそうとしない。
「菱ちゃんのにとっておきなさいと，小母さんはいいから」
　馬小母さんは笑いながらいった。
　菱は，しばらく目をパチクリさせていたが，蓮の実をだいたまま，またさっさと帰ってきた。
　家中のものがどっと笑ったが，李夫人だけは台所にいて何が起こったのか知らなかった。196

308,【瓜】guā　第十九，二 353-23
309,【莲蓬】liánpéng　第十九，二 353-24
・李君は，いつの間にか洗った瓜をひとつ，大きく切って菱にわたし，やっと「あおいの―」と取りかえた。彼はその蓮の実をもって外にでた，馬お婆さんも戸口のところで笑っている。どちらにもって行ったものか左と右をながめたが，やっぱり，腹をきめて，東の棟へ持って行った。馬夫人は，笑いながら受けとってくれた。…（略）…彼女と顔を見合せて笑った。李君はほんとに愉快な気もちだった。196-197

310,【酒】jiǔ　第十九，二 354-2
311,【饺子】jiǎozi　第十九，二 354-2
312,【白饺子】bái jiǎozi　第十九，二 354-3
313,【瓜】guā　第十九，二 354-4
314,【生面】shēngmiàn　第十九，二 354-4
315,【瓜】guā　第十九，二 354-4
316,【酒】jiǔ　第十九，二 354-5
・「さあ，お酒をはじめてくださいな，餃子（ぎょうざ）ももうできますから」李夫人も上機嫌だ，自分の創造した白い餃子をながめていると，腹いっぱい食べておなかがプックリふくれたかわいい白い子猫を見るような気がした。
　英と菱は，片手に瓜をもったまま，かあちゃんから，こねた小麦粉のかたまりをもらい，瓜を食べながら，こねてひよこの形を作って遊んでいる。
　李君と丁さんは，酒をのみはじめた。丁さんは，麻の長衣をまだぬがない。李君はまだいくらものまないのに，もう顔をまっ赤にし，頭からしきりに汗をだしていた。
　丁さんは二，三杯のむと，唇がふるえだし，何度もつばをのみこんでから，やっと話しだした。197
◆趙を絞殺して，取り戻した家作の権利書を取り返した丁さんであった。幸福そうな食卓の裏にある恐ろしい状況を一層，際立出せている。

317,【饺子】jiǎozi　第十九，二 355-15
・李夫人が餃子をはこんできた。大きな皿に二皿，スープがかかって，ほかほかと湯気が立っている。だが二人とも箸を動かさなかった。198-199

318,【凉柿子】liáng shìzi　第十九，三 356-5

・市長がかわった。役所の各部局の空気は，異様な緊張を示した。　…（中略）…

李君は，みんなにとって目の上のこぶのような存在になった。彼だけが，悠然と落ちついていて，まるで心の中に小さな冷蔵庫でもはいっているようだった―「あの野郎，なんてくそ落ちつきに落ちついてやがるんだ」みんなはこう罵らずにはいられなかった。孫さんも，冷蔵庫とはいかなくても，氷柿（北京の名物）ぐらいに落ちついていたが，彼はべつに皆からにくまれるようなことはなかった。199

◆比喩，「凍柿子」とも，直訳すれば「心の中は冷凍柿を食べたようだった」，「ヒヤッとする」の意あり。渋柿を室外において自然に凍らせると，甘柿になる。

319,【酒】jiǔ　第二十，一 360-11

・丁（チン）さんはつれて行こう。丁さんは生まれつき熱帯でぶらぶら暮らすにふさわしい男だ。それにほんとのところ，たしかに丁さんのために，何か方法を考えてやらなければならない。―彼は一日中，朝から晩まで銃殺をこわがっている。いつなんどき酒をのんで警察に自首するかわからない有様だ！204

320,【烧饼】shāobǐng　第二十，二 361-3

・北京全体がまるでむし焼がまのようで，城壁の上なら焼餅（シャオビン）が焼けそうだった。204

321,【果子】guǒzi　第二十，二 362-24

・彼が，ひき返して部屋にはいろうとすると，こんどは，張（チャン）兄貴が，大きなくだものかごをもって，きてくれた。

「義女の菱ちゃんに，くだものを買ってきたよ。まったく暑いねえ」といいながら，庭にはいってきた。206

322,【绿豆汤】lǜdòutāng　第二十，四 364-1

・馬お婆さんがやってきて，息子たちをつれ帰った。

李君は，馬夫人がどういう態度にでるか見ようと思った。

誰も昼食を食わず，ただすこし緑豆のスープをのんだだけだった。207

◆緑豆には解熱作用があり，夏季によく食される。スープというより，「粥」に近い。